



反復と差異の概念に着目した設計提案
 — オランダ構造主義の分析を通して —
 Design Proposal based on “Repetition” and “Difference”

一 序

機能主義の台頭以来、その形式と手法に対しては繰り返し批判と再読がなされてきたが、現代においてその一元的な理論がもたらした均質で単調な「反復」する空間は忌み嫌われる対象となる。

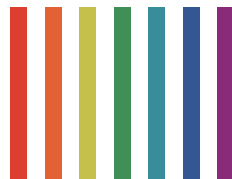
一方で、同様に機能主義のもたらした均質な空間を批判しながら、「反復」という手法を用いて建築と都市に多様性をもたらそうとした流れがある。それは戦後硬直化したCIAMを解体へ導き、後期近代建築運動のはしりとなったオランダ構造主義である。

機能主義において人間は等しく合理的な判断をするものとみなされ、その「同一性」が強調されてきた。これに対し構造主義は、個別的な「差異性」を許容することを目標とし、それらの集積に対して形を与えることが目指された。その具体的な手法が「反復」する空間や架構によって規定される全体であり、逆説的な形式化によって空間に解釈の多様性を与えようとした。現代では廃退したように見えるこの流れは、一方で無自覚的に普遍化したとも言えよう。

そこで本提案では、構造主義が用いた概念及び実践における手法を再評価し、そこから得られた知見を基に設計提案を行うことで、意図的・不可避的に関わらず現れるひとつの形式に対する新たな視点を獲得することを目的とする。

一 差異について

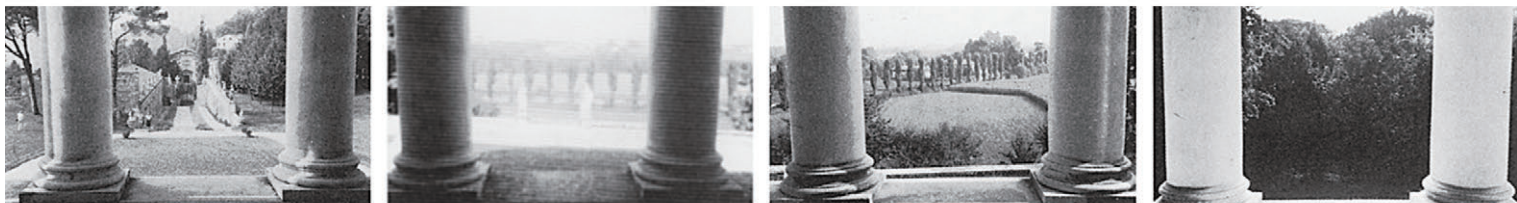
構造主義思想の形成に大きく影響を与えたのは、スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュールの構造言語学における差異の概念である。ソシュールによると人間は概念を言語によって区切っている。例えば「赤」という言葉の概念は「赤」と区別されるあらゆるものとの差異のみによって存立しており、人間は「概念の単位」によって恣意的に世界を切り分けているというものである。



▷
恣意的な分節

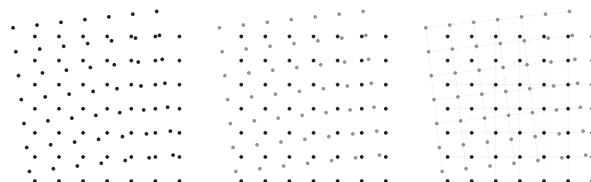
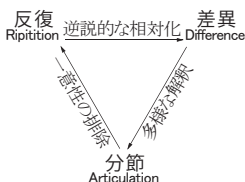
一 相対化

「実際そこには、正面も裏面も側面も存在しない。少なくとも外観すべての面が同じである。しかし建物の内部では状況は異なる。-中略-日差しがそれぞれの面に違った影響を与えるだけでなく、視界もまた完全に異なっている。このヴィラに向かってくる並木道、庭園、ヴィラの付属する農場、そしてその向こうの丘という具合に。このように、このポツンと建っているヴィラがその特徴を最も示すのは都市的な文脈なのである。」
 - Herman Hertzberger



一 反復／差異／分節

構造言語学における差異の概念から、分節という鍵語を導き、オランダ構造主義の目指したものがこれらの緊張関係であることがわかった。ここからはその目指す状態に関する独自の概念がどのようにして実体として現れているかを体系化する。



一 反復の型

構想主義における独自の概念が、実体としてどのように現れているかを分析し、空間の分節に関与する「反復の型」を抽出した。8つの型はそれぞれ、反復という構造が図として作用し、それが置かれる既存の文脈を顕在化或は誇張する i) 文脈の顕在化(図)、構造が地として作用し、その内部に置かれたものの文脈を顕在化或は誇張する ii) 文脈の顕在化(地)、反復の展開方向を意図的に操作し、周囲の文脈との関係を歪める iii) 文脈の置換/介入、単位を重合させながら反復させることで、両義的な空間を連続させ使用者による多様な分節を許容する iv) 単位の重合、ある単位を更に小さな単位で構成する、或はあらかじめ小さな単位に分節することでその境界を曖昧にする v) 単位の隠蔽、反復する図によって地がつくられ、それらが互いに分節の手がかりとなる vi) 図/地、単位の形態に複数の意味を持たせ、反復の意味に複数の解釈を与える vii) 形態の呼応、複数の反復を重ね合わせる viii) 多重の構造である。

思想としての構造主義

Ferdinand de Saussure 1857-1913
 1857 スイスのジュネーブに生まれる
 1876 『インド・ヨーロッパ語における原始的母音体系についての覚え書き』を発表
 1880 ライプツヒ大学より博士号を得る
 1881-91 パリ大学講師
 1892- ジュネーブに戻り一般言語学について講義を行う
 1913 死去

Claude Lévi-Strauss 1908-2009
 1908 ベルギーのリュッセルに生まれる
 1930-32 サンパウロ大学教授
 1949 『親族の基本構造』発表
 1955 『悲しき熱帯』発表
 1959- コレージュ・ド・フランス教授
 1962 『野生の思考』発表
 1973 エラスムス賞を受賞
 2009 死去

オランダ構造主義

Aldo van Eyck 1918-1999
 1918 オランダ、ドリーベルヘンに生まれる
 1942 アムステルダム市公共事業都市開発課
 1946 アムステルダム児童遊園プロジェクト
 1954 チームX発足
 1959 『FORM』の編集者の一員となる
 1966 デルフト工科大学建築学部教授に着任
 1982 エルサレムタウン計画委員会に参加
 1999 アムステルダムにて死去

Herman Hertzberger 1932-
 1932 オランダ、アムステルダムに生まれる
 1958 デルフト工科大学を卒業
 1959 『FORM』の編集者の一員となる
 1965 アムステルダム建築アカデミーで教える
 1970 デルフト工科大学建築学部教授に着任
 1986 スイス、ジュネーブ大学教授に着任
 1990 ベルラーヘインスティテュート・アムステルダム会長

7つの鍵概念

- ① 文脈の顕在化/誇張
反復によって対比的に環境が持つ文脈が浮かび上がる、或は強調される
- ② 媒介空間
空間相互を関係づける、明確に規定され開かれた残存空間
- ③ 双対現象
内-外、開-閉、量塊-空間、変化-恒常、静-動、個-集合など対の事象を結びつけ空間に両義性を与える事
- ④ 関
機能に合わせて明確に分節されるのではなく、あいまいに重ね合わされた領域
- ⑤ コンフィギュレーション
全体の構造が単位によって強化され、単位には全体性があらかじめ潜在している状態
- ⑥ カスバ
非合理的(混沌)と見えながらも、有機的で組織的な秩序・構造をもつ非均質的な環境
- ⑦ 迷宮的透明性
ある構造(反復の形式)が、観察者との関係によって全く違う構造に見える事

反復の型

反復の型	展開事例
i) 文脈の顕在化 / 誇張(図) 	
ii) 文脈の顕在化 / 誇張(地) 	
iii) 文脈の置換 / 介入 	
iv) 単位の重合 	
v) 単位の隠蔽 	
vi) 図/地 	
vii) 形態の呼応 	
viii) 多重の構造 (反復の併用) 	

一 設計提案

一 設計プロセス

分析によって得られた手法を再構築する試みとして、アイクによる設計の「子供の家」の解体・再構築を行う。子供の家はアイクの代表作であり、オランダ構造主義の理論が実践された最初期の作品である。アイクは構造を指定した上で個々の単位の中に丁寧に場所を設計していった。このプロセスは理論と実践における矛盾であり、この作品の魅力でもある。一方本提案では、前章で得た型の複合により構造すなわち単位間の関係を構築するものとし、一意的な分節を許すことなく多様に解釈される全体を設計する。

一 子供の家

まずオリジナルの空間構造を図面と現地調査により分析し、前章で示した反復の型 i) 文脈の顕在化/誇張(図)、ii) 文脈の顕在化/誇張(地)、iii) 文脈の置換/介入、v) 単位の隠蔽、vi) 図/地、vii) 形態の呼応を確認した。子供の家では一意的な空間分節を消去する手法と、逆に分節の手がかりを与える手法が双方から用いられることで空間の多様な解釈を許容していることがわかる。

分節の消去

v) 単位の隠蔽
 空間単位より下位に小さな単位を設けることで、空間単位間の境界を曖昧にしている。子供の家では 3,360mm × 3,360mm の架構単位にそれが現れており、O. ボイガスはこの梁の効果を Floating Module と呼んでいる。

vi) 図/地
 間隙を含みながら室空間単位を反復させることにより、副次的に反復する空間が生じている。これはアイクの言うところの媒介空間であり、Floating Module との相乗効果により、多様な分節を許容する全体が構成されている。

分節の強化

iii) 文脈の置換/介入
 空間単位の反復方向を、最小単位の反復方向とずらすことで深層軸をつくり出している。さらにそれが都市軸、空間単位のもつ方向性と重なることで、ある瞬間に構造(反復の形式)を認識できるような構成となっている。

vii) 形態の呼応
 空間単位のガラス面、開口などの輪郭が直線上に重なることで、ある地点から反復する空間単位を観察することができる仕掛けが設けられている。これは自分の居る単位がどのような構造に属しているかを認識する手がかりとなる。

— 変異する方向

多様な分節の許容を目指す一方、各クラスター及び機能を持つ諸室を周囲の動線空間と別の構造とすることで、空間単位と架構単位の方角のずれが空間分節の僅かな手がかりとなるよう意図した。ここでは、ある単位のまままりが同時に別のまままりに感じられ、ある領域が別の領域に所属しているようにも解釈される。使用者は、ある秩序から突如として別の秩序へと移行するような体験をし、各々の経験から各々の空間が形成される。

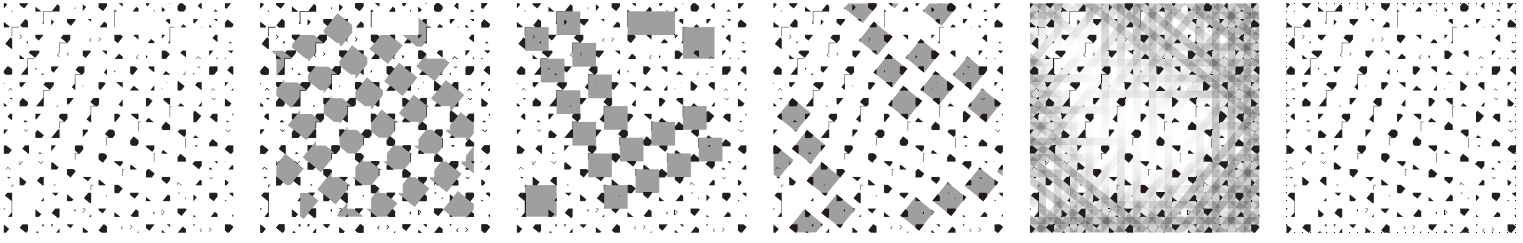


共用部分 - 架構単位と空間単位の方角 / 一致



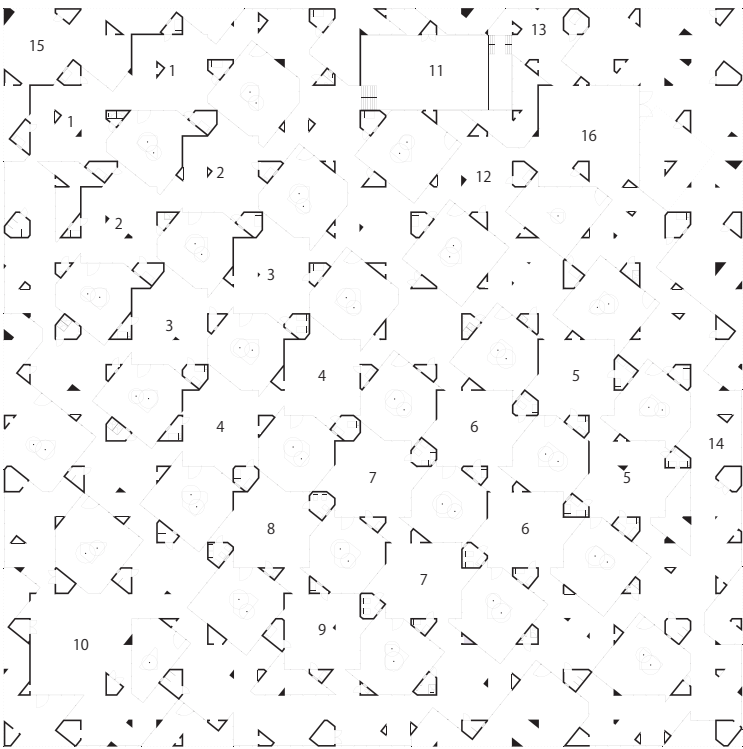
クラスター内部 - 架構単位と空間単位の方角 / 不一致

— Structural Diagram.1



寝室等の機能空間単位 空隙を挟み反復する外部空間単位 「地」として現れる室空間単位 共有スペース / 動線空間単位 形態の呼応による視線の抜け 多様な分節 / 解釈を許容する全体

— Plan S=1:1000



- | | | |
|-------------------------------------|----------------------------------|---------------------------------|
| 1. 14-20-year-old boys' department | 7. 2-4-year-old mixed department | 13. administration and archives |
| 2. 14-20-year-old girls' department | 8. baby department | 14. library |
| 3. 10-14-year-old boys' department | 9. sickbay | 15. garage for minibus |
| 4. 10-14-year-old girls' department | 10. party room | 16. entrance hall |
| 5. 6-10-year-old mixed department | 11. gym and theatre | |
| 6. 4-6-year-old mixed department | 12. head's office | |

— Structural Diagram.2

Beam · Roof

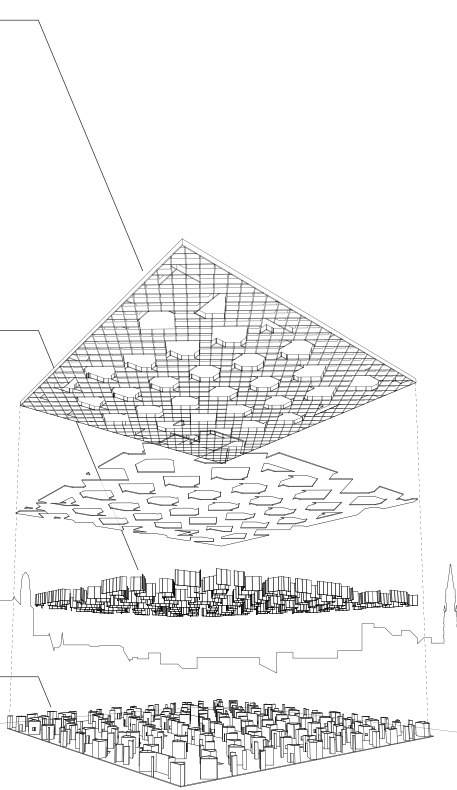
- v) 単位の隠蔽
最小単位を架構単位として見せることで空間単位の輪郭を曖昧にする。
- viii) 多重の構造
空間単位と架構単位的一致・不一致が分節の僅かな手がかりとなる。

Glass · Patio

- vi) 図 / 地
室空間単位を挟みながら同一の大きさである外部空間単位が反復する。
- iv) 単位の重合
室空間単位と外部空間単位が互いに重合・連鎖しながら反復する。

Wall · Room

- vi) 図 / 地
機能が納められた最小単位が室空間単位の輪郭をつくるように空隙を挟みながら反復する。
- vii) 形態の呼応
壁面の輪郭が呼応することで視線の透過と遮蔽に抑揚を与える。





北東から - 内外の空間単位を交互に貫き抜ける視線



entrance hall



gym and theatre



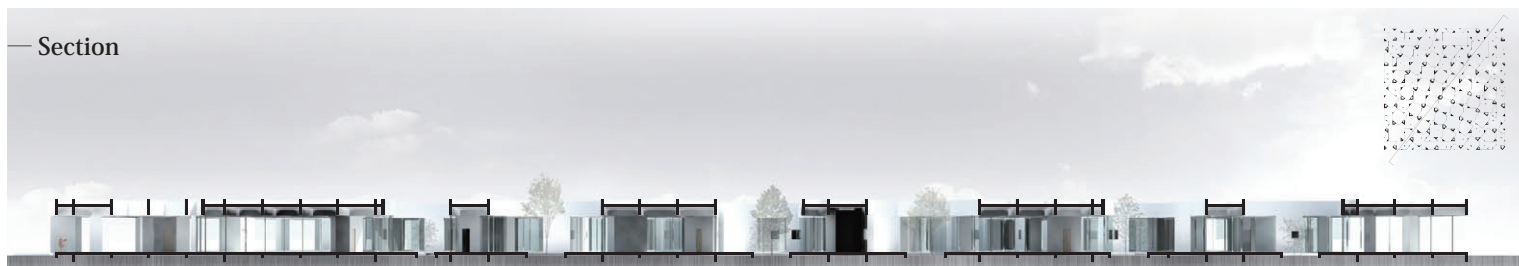
共用部分 .1



共用部分 .2



南側ファサード



— Section